

平成22年5月28日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19720003

研究課題名（和文） 西洋中世における徳倫理学の研究

研究課題名（英文） A Study on the Virtue Ethics in the Middle Ages

研究代表者

松根 伸治（MATSUNE SHINJI）

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：90432781

研究成果の概要（和文）：トマス・アクィナスの徳倫理におけるいくつかの概念を、ギリシャ以来の思想的背景を整理しながら考察し、それぞれの概念の位置づけや意味をある程度明らかにすることができた。この研究が特に着目したのは、「思慮」prudentia、「直知」intellectus、「良知」synderesis、「倦怠」acedia、「高邁」magnanimitasである。これらは哲学的に重要であるだけでなく、私たちの生き方や道徳を考えるうえでもヒントを与えてくれる。

研究成果の概要（英文）：This research investigated several important ideas in the virtue ethics of Thomas Aquinas from a historical and philosophical viewpoint. Our study especially focused on the following: prudentia, intellectus (as a virtue), synderesis, acedia, magnanimitas.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	450,000	2,750,000

研究分野：西洋哲学史

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：中世哲学 徳倫理学 トマス・アクィナス 枢要徳 七つの大罪 良知 高邁

## 1. 研究開始当初の背景

西洋近代以来の道徳的危機や社会問題への反省のひとつとして「徳倫理学」の見直しがあり、ここ二、三十年進行中である。徳の倫理学は現在も主に英米圏の哲学におけるホットな話題のひとつである。本研究は徳倫理の重要な歴史的源泉のひとつとして西洋中世の倫

理思想を考え直すことを課題とする。従来、“アリストテレスへ還る”ことが徳倫理学の主唱者たちに共通する姿勢であったが、アリストテレスと近世の間には、長い中世があった。西洋中世の徳倫理学の研究は、私たちの道徳思想に対して、均衡のとれた見通しと有益なヒントを与えてくれると思われる。

## 2. 研究の目的

(1) 徳と悪徳をその理論の中核に据え重要視する思想は古代ギリシャに遡るが、それはキリスト教思想の中にも様々な変容を伴いながら受容され、十三世紀にはトマス・アクィナスによる総合の試みがおこなわれる。このような倫理思想に大きな変化が生じたのは、トマスの晩年あるいは死後にあたる十三世紀最後の四半世紀であり、そこで生じた変容が、カントに代表されるような規範と義務を重んじる近代の倫理学へとつながっていると考えられる。中世後期における徳倫理の変容と崩壊について考察すること、これが本研究の第一の目的である。

(2) トマス倫理思想の源泉として、一方にアリストテレスを中心とした古代ギリシャ哲学があり、もう一方に聖書や教父のキリスト教思潮があるという理解は間違いではないが、トマスの思想形成はきわめて多面的・多層的である。そこで具体的には、四つの枢要徳をめぐる古代以来の様々な理論と、七つの根源的悪徳（いわゆる七つの大罪）をめぐる思想史上の紆余曲折を丁寧に整理する必要がある。トマスにおける徳の倫理学の多様な源泉に注目し、重要な個々の徳目それぞれに関する概念史的・思想史的研究をおこなうこと、これが本研究の第二の目的である。

## 3. 研究の方法

(1) 七つの大罪の哲学史的考察。M. Bloomfield, *The seven deadly sins: an introduction to the history of a religious concept*. Michigan State UP, 1967はやや古いですが、このテーマに関する歴史的考証のためには現在も必読の文献である。この著作などを中心に、七つの大罪の成立史を大きく把握しながら、個々の思想家のテキストの検討を進める。すでに発表した論文「倦怠と悲しみ—トマス・アクィナスの *acedia* について」で、調査や考察が不十分であったいくつかの箇所を再検討することから研究を始める。

(2) 思慮と良心の関係。トマスが倫理的な徳と知的な徳との関係をどのようにとらえていたか、また、直観的に善悪を判断するような力についてどのように考えていたか、さらには「諸徳の結合」という論点など、徳をめぐる議論の中心テーマの考察を含む。D. M. Nelson, *The priority of prudence*. Pennsylvania UP, 1992; T. C. Potts, *Conscience in medieval philosophy*. Cambridge UP, 1980 など重要な研究書との対話をおこなう。

(3) 徳をめぐるストア派の議論とトマスと

の思想史的な関連。我が国でもストア派の研究と翻訳が近年盛んになってきているので、原典テキストと外国語の研究書に加えて、多くの良質な日本語文献も活用できる。

(4) 十三世紀後半における倫理思想の展開と変容。主知主義と主意主義、アリストテレス主義とアウグスティヌス主義として従来整理されてきた論争の構造を、さらに多面的・多層的な要素を含むものとして再提示する。トマスを結節点とした徳倫理学の成立と崩壊の道りをできる限り綿密にたどることによって、大きな哲学史的視点を獲得することをめざす。

## 4. 研究成果

(1) トマスの実践知に関する理論を、徳と知の関係という問題の脈絡で考察した。アリストテレスの枠組みと課題を下敷きにした「思慮」*prudentia*、「直知」*intellectus* に関する理論に、思想史的由来の異なる「良知」*synderesis* という概念がどのように合流しているかを研究し、これら三つの概念に着目して、「*prudentia, intellectus, synderesis*—トマス倫理学における徳と知」と題する研究発表をおこなった。アリストテレスの *nous* の多義性を引き継ぎながら、徳としての *intellectus* には、さらに意味の広がりが増えられている。トマスは実践の領域でも普遍的原理をとらえる直知を論じるので、この点ではアリストテレスの逐語的註解を踏み越えていると言ってよい。そして、*intellectus* のこの側面は、*synderesis* の役割と重なる。

(2) 東方修道制の歴史における悪徳の議論とラテン中世におけるその受容について考察した。東西教会の徳と悪徳のとらえ方の違い、理論と実践の関係などを、教父やスコラ哲学者の議論に基づいて研究した。七つの根源的悪徳（いわゆる七つの大罪）に関して、特に「倦怠」*acedia* をめぐる思想史の流れを整理し、トマス・アクィナスの理論の独自性を、「怠惰・鬱・悲しみ」という三つの側面の分節によって考察した。

(3) 「高邁」*megalopsychia = magnanimitas* に関する研究。アリストテレスがポリス市民の徳として重視したこの美德に、トマスがどのような位置づけを与えたかを考察した。特に、中世キリスト教思想で重んじられる「謙遜」との関係に着目して、「高邁」の徳—古代から中世へ」と題した研究発表をおこなった。さらに、論文「トマスにおける《高邁》*magnanimitas* の位置づけ」において、高邁という「古代的」「異教的」な徳がキリスト教倫理思想の中にどのように取り入れられて

いるかを論じた。この論文では、第一に、トマスが高邁を勇気の部分と見なす意味をアリストテレスとの比較によって明らかにした。第二に、この問題を古代ギリシャ以来の枢要徳に関する思想系譜を背景にして検討し、気概(トマスの言葉遣いでは「怒りの力」)の重要性を指摘した。第三に、一見対立するように思われる高邁と謙遜という二つの徳がトマスの徳の見取り図の中では共存していることを詳しく考察した。

(4) トマス・アクィナス『神学大全』第2部-2, 123-140 問題(勇気についての箇所)の翻訳をおこない、これが創文社から『神学大全』第21巻として刊行予定である。勇気の部分を論じる『神学大全』第2部-2第128問題以降で、アリストテレスに加え、トマスが典拠として頻繁に用いている特徴的な資料がいくつかあることがわかる。キケロ『義務について』、同じくキケロによる若き日の習作『発想論』第2巻第54章。さらに、マクロビウス『スキピオの夢註解』第1巻第8章、擬アンドロニコス『情念について』である。トマスは基本的にキケロが『発想論』で提案する「大度量・自信・忍耐・堅忍」という四区分を勇気の部分として認める。ただし、ここでは高邁は挙がっておらず、高邁を勇気に関連づけて挙げているのはマクロビウスと擬アンドロニコスである。トマスはキケロの言う「自信」は実質的に「高邁」にあたりと解釈し、勇気の部分である徳の名称としては、最終的に高邁のほうを採用している。勇気の下位区分や「部分」という構想はそもそもアリストテレス自身には見出せない視点だが、上に挙げた様々な思想的源泉を整理する作業を通じて、トマスは結果的に高邁を勇気の部分として位置づけ、これを(アリストテレスをおおいに用いて)入念に分析することになった。

(5) トマスにおけるストア派の要素という論点については、R. Sorabji, *Emotion and Peace of Mind: From Stoic Agitation to Christian Temptation*. Oxford UP, 2000 など重要な研究書を検討しながら研究を進めた。さらに、この論点と関連して、中世哲学会におけるシンポジウム「中世哲学とストア派倫理学」を企画した。

(6) 今後の展望  
徳倫理学 *virtue ethics* に関しては近年多くの研究書やアンソロジーが出版され、理論的研究に加えて思想史的研究も盛んになってきている。特に中世に関しては、I. P. Bejczy (ed.), *Virtue Ethics in the Middle Ages: Commentaries on Aristotle's Nicomachean Ethics, 1200-1500*. Brill, 2007, および、

I. P. Bejczy and R. G. Newhauser (eds.), *Virtue and Ethics in the Twelfth Century*. Brill, 2005 両書所収の各論文が、このテーマを詳しくあつかっており、これらの研究の批判的検討がひとつの重要な課題である。また、徳の倫理学の主唱者のひとりで見なされる A. MacIntyre は、*Dependent Rational Animals: Why Human Beings Need the Virtues*. Duckworth, London, 1999 において、他者への依存を認めそれに感謝する徳 (the virtues of acknowledged dependence) の重要性を指摘しており、この方面の理論的研究も進められるべきである。

また、中世後期の倫理理想におけるストア派の影響という研究テーマは、今後より詳細に掘り下げられるのがよい。アリストテレスの絶大な影響だけでなく、教父を通じたストア派思想、キケロやセネカなど「ローマのストア派」がどの程度、またどんな仕方でも中世後期の神学者たちに読まれ、受け入れられたか。このようなスコラとストアの関係に関する研究は国内・国外ともに、それほど進んでいない。具体的な研究の切り口としては、以下のような論点が考えられる。passio (感情) の位置づけ、理性と passio の関係、それぞれの passio についての具体的考察 (たとえば怒り)、禁欲主義、徳の原理的考察 (徳の「部分」という考え方、諸徳の結合、など)、それぞれの徳の具体的考察。たとえば四枢要徳 (思慮・正義・勇気・節制)、officium (義務) の概念、indifferens (善悪無記) の概念、「理性に従う」「natura に従う」—「理性に反する」「natura に反する」、良心と自然法、運命・自由・摂理、倫理学の位置づけ (学問論)、観想と実践 (幸福論)、ストア思想と修道制。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 松根伸治, トマスにおける《高邁》magnanimitas の位置づけ, 南山神学, 査読無, 33号, 2010, 193-212

[学会発表] (計3件)

- ① 松根伸治, 怠惰がなぜ大罪なのか—トマス・アクィナスの acedia (アケーディア) 論, 河合文化教育研究所ヨーロッパ研究会 (思想史部会), 2010年3月20日, 河合塾京都校
- ② 松根伸治, 「高邁」の徳—古代から中世へ, 河合文化教育研究所ヨーロッパ研究会 (思想史部会), 2008年7月19日, 河合

塾京都校

- ③ 松根伸治, prudentia, intellectus, synderesis —トマス倫理学における徳と知, 京大中世哲学研究会, 2008年6月28日, 京大会館

[図書] (計1件)

- ① 中川純男責任編集, 中央公論新社, 哲学の歴史 第3巻 神との対話 [中世], 2008, 532-533 (松根伸治 「自由と恩寵」)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松根 伸治 (MATSUNE SHINJI)

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号 : 90432781